2023年
4月

マナ通信

今月のマナ通信は、

◎２月の聖書日課（詩篇、ルカの福音書）
◎土・日曜日の学び（捕囚と帰還）　の感想です。

イスラエルの民が捕囚から解放された後どうなったんだろうか興味のあるところです。

そもそも、国が北王国と南王国に分裂したのが間違いでした。元を正せばソロモンの晩年の雑婚（異民族の結婚）に原因があると思われます。男とはそういう者で、生活の基盤が嫁の方に傾いていくものなのです。従って、偶像礼拝が起こることになります。その為、神はアッシリヤとバビロンを用いてイスラエルに試練を与え、悔い改めを求めた。70年間も捕囚の目にあって故国へ帰る時が来た。

神はペルシャのクロス王を用いてイスラエルを再建に向けたのでしたが、なかなか思うようにいかなかったのです。

紀元前538年、帰還第一陣は約５万人で政治的指導者としてゼルバベル、宗教的指導者としてヨシュアがあたりました。母国に戻って、仮庵の祭りを実施する秋が訪れ、民は一斉にエルサレムに集まって祭壇を築き、律法に従って各種のささげものをしました。翌年神殿工事に着手し、神殿の礎が築かれた時、民は皆、主に賛美を捧げて喜びます。しかし、多くの困難や妨害があり、工事は一時中断したり、難航して紀元前515年に完成しました。14年間の中断があり実に23年かかったのです。

それは当時、ユダ州はサマリヤの管轄下にあり、自分たちの既得権益が失われるので理由をつけて帝国側に訴え工事を妨害していたのです。それから80年の月日が流れエズラがエルサレムに帰還を願い出て第二次帰還として5000名程帰ります。バビロンを出て４ヶ月かけてエルサレムに到着します。エズラは祭司であり、モーセの律法に通じている学者でした。エズラの帰還の目的は人々の信仰生活を立て直すことでした。

「これらのことが終わった後、指導者たちが私のところに近づいて来て次のように言った。『イスラエルの民、祭司、レビ人は、カナン人、ヒッタイト人、ペリジ人、エブス人、アンモン人、モアブ人、エジプト人、アモリ人など異国の忌み嫌うべき習慣と縁を絶つことなく、かえって、彼らも息子たちも、これらの国々の娘を妻にし、聖なる種族がもろもろの地の民と混じり合ってしまいました。しかも、指導者たち、代表者たちがこの不信の罪の張本人なのです。』私はこのことを聞いて、衣と上着を引き裂き、髪の毛とひげを引き抜き、茫然として座り込んでしまった。」（**エズラ9:1-3**）

神を中心とした信仰生活を再構築しようとしたイスラエルの人々でしたが、半世紀も経つと、又、偶像礼拝に陥ってしまっていました。エズラの帰還の目的は人々の信仰生活を立て直すことでした。このような状況にエズラは愕然（がくぜん）とし、茫然自失（ぼうぜんじしつ）となり、けれども神に祈り、自分の民族が犯してきた罪を告白します。まるで自分が犯した罪のように！

エズラの雑婚に対するさばきは厳しかった。他国の女と結婚している者は離縁させ、女と子供は母国に帰された。これを３年間で成し遂げたと言われてます。こうして、エズラやネヘミヤ（城壁の再建）の強烈なリーダーシップによって、それに預言者ハガイ、ゼカリヤ、マラキのカづけもあって、エルサレムは一応格好をつけました。

しかし、まだ多くのユダヤ人が捕囚された地に留まり、物品繁栄の元に生活してます。そして、約400年が経過しメシヤが誕生します。それは、まだ帰還しないユダヤ人も異邦人も信じることで救われる新約の時代の幕開けです。（畑中伸之）

そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。…シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」（**ルカ2:25,28-30**）

〈みことばを味わおう〉から教えられたことです。

私たちは人生を生きる上で、何を待ち望んで歩んでいるでしょうか。シメオンは、聖書に約束された救いを待ち望んでいました。シメオンは、ただキリストに出会うためだけに人生を歩んできたのでした。

私が神様の救いへと導かれたきっかけは、幼い時（小3）に教会学校でいただいた「みことばカード」に書いてあったみことば「心の貧しい人は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」（**マタイ5:6**）

父は私をひとり遠い、学区外の小学校に通わせました。転校生で、通学も一人、クラスでも一人、家でも一人、心寂しいが、心貧しいになったのか、この御言葉から天の神様がおられて、私のことを見守って下さっているように思えて、心慰められておりました。

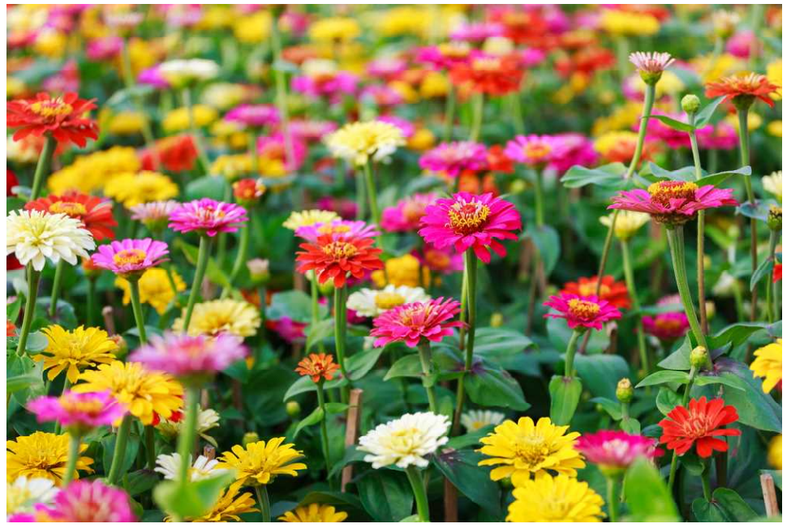
やがて20歳になって、救いの恵みにあずかり、クリスチャンになって、信仰生活を送るうち沢山の恵みにあずかりながら、心貧しくない自分が悲しく、苦しく思うようになっておりました。その後、いろいろな兄弟姉妹と交わりの中で、学ばせて頂き、教え導いて頂きました。感謝な日々でした。

真に心貧しいお方はイエス様お一人だけです。神様は御子のイエス様を私の罪のために罰して死に至らせ、私を義とするためによみがえらせられました。さらにクリスチャン生活が出来るように聖霊を遣わして下さいました。

イエス様によって罪赦されただけでなく、新しい命に生きることが出来るようにして下さいました。

「神は、罪を知らない方を、私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあって神の義となるためです。」（**Ⅱコリント5:21**）

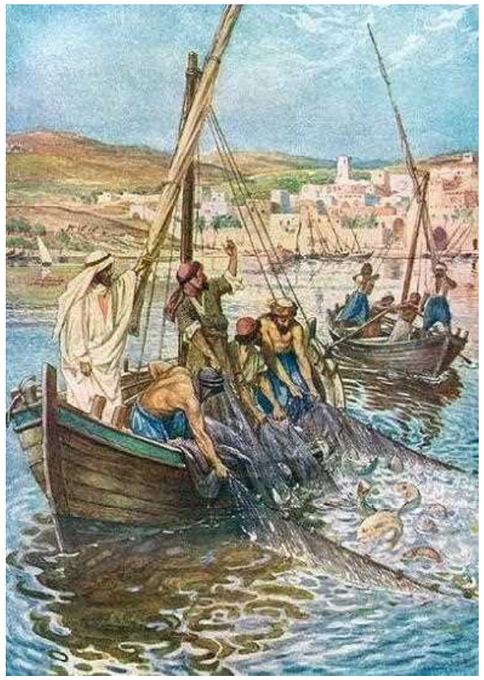
「キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。」（**ロマ6:4**）　（福島三弥子）



エズラ記を、解説して貰いながら読んで、自身の姿を見直しました。

信仰生活も長くなりますと、ともすれば礼拝出席や祈りも、形式的になりがちです。これはまずいと

思うこともあります。感謝の祈りも言葉だけになったり、十字架による救いと永遠の命も本当にあり得ない恵みと言うことを、脇に置き忘れそうです。



誘惑は小さいものこそ吟味しなければならないと思わされています。神の目を恐れてびくびくと従うというのでは、神は喜ばれません。心の底から律法に忠実に従うことが、大切なのですね。

ネヘミヤ記8章10節の言葉にとても慰められました。御馳走を食べて喜び楽しみなさいと、言われています。難行苦行だけではなく、完成したときには喜びなさいと、神様の優しさが溢れている気がします。

ルカ5章5節のシモンの「でも、おことばですので網を下ろしてみましょう。」

素直な人だと感心しました。私だと「えー、又ですか。もう無理です」と言ってしまいそうです。

このときすでにシモンは先生と言っていますので、尊敬の念を持っていたのですね。

大漁をたまたま幸運だったと片付けずに、主イエスの御栄光まで見つめることのできたシモンの信仰に見習いたいです。（広瀬裕子）

キリストとの結合」という真理。それは私が主イエスを信じたその時に、キリストご自身に結合されたことであると。それが御霊によるバプテスマであり、私を2000年前の主の死、葬り、よみがえりに一体化し、その立場においてくださったということです。

今の時代に生きている私を2000年も前のあの事件、キリストの死、葬り、よみがえりに結合するなど、なんとも不思議この上ない出来事ではあるのですが。

聖霊のバプテスマについては、もやもやして確信を持つことができないでいたので、それをはっきりさせていただいたことは大いなる感謝です。

キリストに結合したという真理を基にしたクリスチャン生活がどのようなものか、次に続く講解が楽しみです。（高橋美枝）

私たちの神は天におられその望むところをことごとく行われる。」（**詩篇115:3**）

中学校の同級生とカトリック教会に行ったのは高校生の時でした。家には、兄が持っていた十字架の壁掛けがあったのは、今でも覚えています。そして、私が「自分の意志で」教会に行くことになったのは13年前のことです。

教会での学びは所沢に来てから、兄弟姉妹と学び賛美するようになってからです。そして「神様は、どこにいらっしゃるのですか」等と言わなくなりました。

「私の神よ。耳を傾けて聞いてください。目を開いて私たちの荒れすさんださまと、あなたの御名がつけられている都をご覧ください。私たちが御前に伏して願いをささげるのは、私たちの正しい行いによるのではなく、あなたの大いなるあわれみによるのです。」（**ダニエル9:18**）

神様以外のものに頼り、期待し、何かを願うことがあります。それを聴いてかなえることが出来ないのが偶像です。弱さを持つ人間にとってはいろいろなものが偶像になりえます。愚かにも、神様よりも偶像を大事にしてしまうことがあります。

「あなたは自分のために偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造ってはならない。」（**出エジプト20:4**）

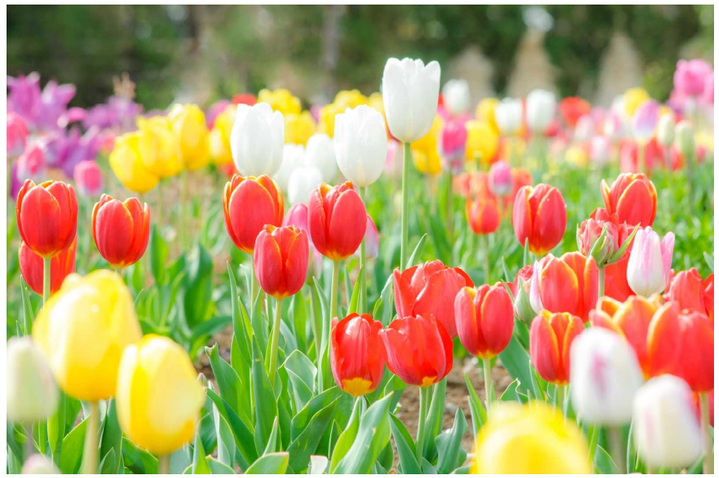
私たちが、どんなに弱くもろいものか、何を必要としているのか、どうしたら元気になれるかを真の神様はすべてご存知です。この神様を信頼して歩みましょう。（木村邦夫）

その人は悪い知らせを恐れず主に信頼して心は揺るがない。その心は堅固で恐れることなく自分の敵を平然と見るまでになる。」（**詩篇112:7-8**）

悪い知らせは受け取りたくないものです。不安が生じたり、対応策を考えるので頭がいっぱいになってしまったり。しかし、この詩篇の言葉は、悪い知らせを恐れない方法を教えています。それは主に信頼することです。

「自分の敵を平然と見るまでになる」とはどんなにか強い心の持ち主でしょうか。その人自身の心構えや鍛錬でそうなったのではありません。主を信じることに徹しているのだと思います。

あらゆる困難や目の前の敵を支配される全知全能なる神・主を信じて歩めるのは幸いだと思います。主は私たちをそのように新しく造り変えて下さり、常に導いておられると信じます。（永井亮子）



主の恵みは私たちに大きい。主のまことはとこしえまで。ハレルヤ。」（**詩篇117:2**）

庭の梅の花が咲いています。小さな枝ですが、香りが辺りに漂い、春の訪れを感じます。

2月13日の[みことばを味わおう] に、「この117篇は詩篇の中でいちばん短く、また聖書全体の中でもいちばん短い章(篇)で、わずか2節です。けれどもこの2節の中に、世界大のビジョンが表されているように思います。」と、ありました。

大いなる主の恵みと『永遠』の主のまことが凝縮されているようです。海も、空も、地も、鳥も、花も、すべて主が創造されました。

主は、どれほど私たちを愛し、救いの中へと導いておられるのでしょうか。少しずつでも、尊いイエス・キリストの十字架の贖いと、救われた恵みを証しすることができたら幸いです。（外處トミ）

梅の花　香り漂う　そのごとく
　キリストの香り　我も放たん

2023年2月23日

群馬県桐生市南公園の梅

主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。」（詩篇118:1）

神様は決して変わることのない善なるお方で、全知全能であるにも関わらずわたしたちを愛し気にかけてくださいます。なんという恵みでしょうか。いつもそのことを覚え、今日も主に感謝して歩んでいきたいです。（外處光歩）

これは主が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。」（詩篇118:24）

人の言葉によって傷つきすぐに疲れてしまう弱い私ですが、主はいつも私を守ってくださることを覚えて感謝します。

「この日は主が設けられた日だから、私はこの日を喜び楽しもう」と言って一日を始め、「主が私の救いとなってくださっている」と信じて感謝する日々を歩むことができたら幸いです。（外處結実）

良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。人の口は、心に満ちていることを話すからです。」（ルカ6:45）

私の心の倉は良いもので満ちているだろうかと心配になります。答えは、いつも自分が何を口にしているかで確認できると御言葉は教えて下さいます。

確かに、感謝なことに昔よりは倉から悪い物を出すことは少なくなったように思えるのは、神様が忍耐強く訓練を通じて汚れた倉を片付け続けて下さったからだと思います。

改めて、本当に正しい言葉は神様からいただかなくては出てこないことを教えられます。特に、最近は、自分で何かを決定することにも躊躇（ちゅうちょ）するようになりました。

自分の考えに自信が無くなり、神様の御心に叶うか否かを気にするようになってきたからです。改めて、私の狭くて暗い心の中で、お働きになってくださっている神様に感謝を覚えます。（外處徳昭）

さばいてはいけません。そうすれば、あなたがたもさばかれません。人を不義に定めてはいけません。そうすれば、あなたがたも不義に定められません。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦されます。」

（ルカ6:37）

この聖句の前の36節に、「あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くなりなさい」というみことばがあります。私のような欠点だらけの罪人が、救われて神の子にさせて頂いているのは、ひとえに神のあわれみによります。神があわれみ深いお方でなかったら、神に敵対していた私は、神の怒りの下にあるほかありませんでした。

それを神は限りない愛のお心のゆえに、一切の犠牲をご自身の側に引き受けられて、御子イエス・キリストを私の罪のために贖いとなし、神に対する私の一切の罪を赦して下さいました。

ただ赦しただけでなく、神の子として、神の家族に迎え入れてくださり、永遠の御国の約束を与えて下さっておられます。この神のあわれみの中に生かされている者、それが私です。

神のあわれみに生かされている者同士、兄弟姉妹にあわれみの心を持って接していくこと、それはあたりまえのことです。

「…私をさばく方は主です。ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごとも明らかにされます。」（Ⅰコリント4:4-5）。

神だけが人をさばかれるのです。私たちは口やかましい者であってはなりません。批判的であら探しをする精神は、愛の律法に背くものです。

しかし、キリスト者がさばかなければならない場合もあります。不信者とつり合わないくびきを一緒につけてはいけないからです。

「不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。」（Ⅱコリント6:14-15）。

家庭においても教会においても、罪はさばかれなければなりません。私たちは善悪の区別はしなければなりません。しかし、他人の動機を非難したり、他人の名誉や品性を傷つけたりしてはなりません。

「赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦されます」。

ここだけを読むと、私たちが赦されるかどうかが、進んで他人を赦すかどうかにかかっているかのように見えます。しかし、ロマ書等のみことばによれば、信仰によってキリストを受け入れるなら、無条件で赦されるということを教えています。

矛盾しているように見えるこの教えを、どう一致させたらよいのでしょうか。その説明として、「二種類の赦し」について述べることができます。一つは「法的な赦し」であり、もう一つは「親としての赦し」です。

「法的な赦し」とは、さばき主である神が、主イエス・キリストを信じるすべての人にお与えになるものです。キリストが私たちに代わって罪の報いを受けて下さったので、それを信じる者は罰を受けなくても済むのです。それは無条件に与えられるものです。何と感謝なことでしょう。

しかし、「親としての赦し」とは、父なる神が、過ちを犯した子どもに対して、子がその罪を告白して捨てる時にお与えになるものです。この赦しは、神の家庭内での交わりを回復させるものであり、罪に対する罰とは全然関係がありません。

私たちが互いに赦し合おうとしないなら、神は、父として、私たちをお赦しになることができません。神は快く赦してくださるお方なので、他人を赦さない者とともに歩んだり、交わったりすることがおできにならないからです。ここでイエス様が、「そうすれば、あなたがたも赦されます」と言われたのは、このような「親としての赦し」のことですね。（福島勲）

貴重なご感想をありがとうございました。
次回はマナ３月号の感想を４月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。（永井）